

会 議 録

1 会議名

第2回上越市観光振興計画策定検討委員会

2 議題（公開・非公開の別）

- (1) 第1回上越市観光地域づくりワークショップの実施報告
- (2) 骨子素案（コア部分）について
- (3) 意見交換

3 開催日時

令和元年9月17日（火）午後2時から

4 開催場所

上越市レインボーセンター 多目的ホール

5 傍聴人の数

1人

6 非公開の理由

なし

7 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

・委員：丁野朗、平原匡、中牧俊明（代理）、齋藤光雄、板垣朗、南博幸、
渡辺花、亦野潤一、今井圭介、上原みゆき、山下智史、北嶋宏海
（欠席3名）

・事務局：観光交流推進課 吉田課長、小池副課長、岩野副課長、五十嵐係長、
見波主任、小林主事

8 発言の内容

【小池副課長】

それでは、議事に移りたいと思うので、丁野委員長進行をよろしく願いしたい。

【丁野委員長】

前回皆さんからとても素晴らしい意見を頂戴した。やはり総花的なものでなく、
テーマを絞り込んで、具体的な活動に繋げられるようなものをきちんと議論した方
が良いという意見が何人かの方からあった。

また、新潟県でも総花的ではなく現在、食というテーマで取り組まれており、ま

た、発酵食文化といった意見もあった。やはり、魅力的な資源をしっかりと磨いていくということも考えていかなければならないということも感じた。

それから、観光は目的でなく、手段であるといった意見も頂いた。それはこのビジョンも含めて、私たちは何を目指しているのかということをも明確に考えた方がよいということも話し合った。

前回の会議のあと、観光について考えるワークショップが開催されて、色々な方から参加いただき、さらに観光について議論が深まっているかと思うが、委員からも実際何人かそのワークショップに参加していただいているので、はじめに参加した感想をお話しただければと思う。また、オブザーバーという形で参加した委員もいらっしゃるので、その方からも意見をいただきたいと思う。

その後、今回のメインである、計画の骨子案について前回の議論も踏まえ、深堀していきたいと思う。そして、最後に意見交換を行いたいと考えている。

それでは、議事について次第に沿って事務局から説明をお願いします。

ー (1) 第1回上越市観光地域づくりワークショップの実施報告ー

【五十嵐係長】

※「資料1 第1回上越市観光地域づくりワークショップの実施報告」

に基づき説明

【丁野委員長】

ワークショップでは、経済的効果と社会的効果についての意見が半々だったとあるが、今、全国の文化財がなかなか保全できなくて、文科省が一生懸命支援しているが、文化財とは、本来地元の人たちが自分たちで守っていくという仕組みができない限りは、後世まで残らないと思っている。だから、地域に文化財を維持していこうという意識を継続させる社会的効果を維持するためには、一定の経済的効果が必要である。つまり、地域が豊かになっていくということによって、文化財がさらに保全されていく。保全と資源の活用というのは、ある意味表裏の関係であり、この結果は非常にいい結果だったのではと感じている。

それでは、ワークショップに参加された渡辺委員と亦野委員から、それぞれ当日の様子などをご報告を頂きたい。

【渡辺委員】

前回のワークショップに参加して感じたことは、やはり皆さんこの地域を良くしようという熱意を非常に持っている方が多く、とても刺激になった。

ただ、少し言い方が雑かもしれないが、自分の施設をより良くしたいっていうような意識の方も中にはおり、前回私が述べさせていただいた、良いものが点々としており、それが線として繋がっていないということを感じる場面もあった。ただ、皆さんが同じ方向を向いていければ、よりよい観光地づくりができるのではという期待も感じる事ができた。

【丁野委員長】

前回、熊本からこちらへ来て地元の人にどこかいい所があるか聞いてみたら 何もないと言われ、少し驚いたということを知っていたが、そういうところは どうやって、変えていくというか、どうやって浸透していけばよいか、難しい課題だが、外からの目を見て、そのあたりで何か気づくことはあるか。

【渡辺委員】

私の地元の熊本市も、以前は観光する場所として何かいい所はあるかと聞かれると皆何もないとよく言っていた印象があるが、ただ、地元がとても好きだという人が非常に多く、進学などで外に出ても戻ってくる、熊本に戻って就職する人も非常に多くて、やはり地元を自慢したいという強い気持ちがあるところが良いのだと思う。

熊本市は、観光名所というと思いつくのが熊本城ぐらいしかないが、やはり来て欲しいという思いがある。「良いところだけ来て」とよく大学の友達など、周りの人に言うが、やはり地元のことを知ってほしい、自慢したいという気持ちが大事だと思っている。

【丁野委員長】

地元の間人が一番地元の資源に疎い、という所が上越市に限らずある話であるが、そのあたりはどうか。

【渡辺委員】

確かに、私も行ったことがないところがまだまだたくさんある。

【丁野委員長】

また、後ほど意見を頂きたい。ではもう一人、亦野委員が参加されているので、

感想などをお願いしたい。

【亦野委員】

私も参加させていただいたが、かなり展開の早いワークショップだったなと感じたが、非常に有意義だったと思っている。何か論点を絞ってそれに対する解決策を考えるということであればまた違った感じかと思うが、今回の目的はそうではないと感じた。

資料にも書いてあるが、「様々な角度や視点から話し合ってもらえるような雰囲気作りに努めるとともに多様な価値観があることを認識してもらうことを意識した」とある通り、やはりその横の繋がりというか、それぞれがどのようなことを思っているかということ共有する意味では非常に有意義だったと思っている。もちろん色々な方と話をし、新たな気づきも得られたが、それ以上にやはりみんな考えていることは同じだということが共有できたことが非常に良かったと思っている。

先ほど渡辺委員からも話があったが、点在する魅力が地域の魅力になっていないといったようなことを非常に皆さん同様に思われており、そのことを共有できたことが非常に有意義だった。

今回のワークショップの良さは、課題解決型の会議で、このような課題があるが、これについて皆さん考えてくださいというスタートではなく、どのような課題があるかというところからスタートしたことであり、みんな考えていることが一緒だったんだという非常に一体感が生まれていく一つのきっかけになったのではと思った。

最後はやはり地元自慢したいという地域にしていかなければならないというのは先ほどお話いただいた通りだと思うが、ワークショップの中で出た意見で、長野の安曇野に生まれた人だったら例えば生まれたときから「わさび」が日本一だという意識を持って子供が育っていくと。そのため、大人になってもうちの地域は「わさび」が一番だとなるが、上越市に果たしてそういったものがあるのだろうかということで、大人になった時に、上越市はやはりこれだと伝えるためにはわかりやすい観光資源や魅力を作り上げていく必要があると感じた。計画の中にもあるが、やはりわかりやすい理念とわかりやすい観光資源の掘り起こしといった部分の必要性を強く感じたワークショップだったと思う。

【丁野委員長】

ワークショップに参加した方の地域的なバランスはどのようなものだったか。

【見波主任】

地域的なバランスで言えば、高田、直江津などいわゆる中心市街地の事業者と中山間地域の方が三等分とまではいかないが、どこかの地域に集中するというわけではなく、色々な地域の方から参加いただいた。

【丁野委員長】

ワークショップの中で、「一番行ってみたい観光地」などを聞いてもらっているが、その観光地に行ってみたいと思う理由は何なのかということは重要なポイントである。なぜ行ってみたいと思うのか。よく訪れていて良いといった所もあれば、イメージ的にその地域が持っている雰囲気など、よく私は物語と言っているがそういうものをちゃんと持った地域だとか何かしら理由があるはずである。逆に言えば、上越市がそういう場所になってもらわなければならない。裏返すと非常に重要なポイントかもしれない。

今、お二人からコメントをもらったが、ワークショップには参加していないが、見学されていた方も3名いらっしゃる。それぞれコメントをいただきたい。

【板垣委員】

本当に大勢の方が来られて、いい雰囲気の中で、話が出来ていたと感じた。

ただ、時間に限りがあったためか、皆が言いたいことが本当に言えたのかと思う部分はあった。皆の思いは一緒だが、それを計画を策定するときにはどのようにつなげていくのかというのは、なかなか難しいと思った。

ただ、参加された皆さんは本当に真剣に自分の思いを語っておられたと思う。

【南委員】

このワークショップは2時間半という非常に長い時間だったが、皆さん楽しそうに議論ではなく協議というか意見交換をされていたなと思っている。観光はやはり楽しくなければ、来る人にも伝わらないとそんなことを意識してか、皆さん楽しそうであった。

ワークショップの中で出たコメントについて、まとめていただいているが、2点非常に興味深かったことがある。グループワークの二つ目「10年後どんな観光地域にしたいか」の中で、「住んでいる私たちにとってどんな観光地域にしたいか」と

いう部分で、どれも素晴らしい意見だったが、特に、子供たちが残りたいと思えるというところがちょうど私も回っているときに、意見を聞かせていただいた。地域に愛着と誇りを持つことで、子供たちが外に出ないで残ってくれる。また、一旦就職等々で出ても、また戻ってくるんじゃないかと、そんな意見だった。

今、全国どこも人口減少ということで、子育てや仕事の関係など、色々な取組をしているが、この観光振興というのも、一つの方策ではと思った。具体的には出てこないがそんなことを感じた。

それからもう1点、ごみのないきれいで清潔感のある地域にしたいとおっしゃっていた方がいた。この方がおっしゃるには、自分の家にお客さんを招くときには、家の中を掃除したり、きれいにするだろうと。観光も同じことで、範囲が広がるけれども、一人一人がそういう意識を持てば、町もきれいになるんじゃないかと。そんな意見であった。観光は広く捉えれば、地域の環境整備という環境美化、そういうことにも繋がっていくと思った。改めて観光は色々な分野に関係しているというか、影響を与えるんだと認識させていただいた。

意見交換すること自体が貴重な時間だったのだろうと、そう感じている。

【丁野委員長】

私も2点、特に子供についての意見が印象的であった。例えば、同じ県の中でいうと、燕市や三条市では、色々な所へ子供たちが出向いて行って、そこで体験をするというような教育をやっている。教育の一環ではあるが、それも広い意味で言うと観光であり、それが非常に繋がっている。燕三条はどんなまちかということの子供たちが身をもって体験し、うちの町はこんなものを作っているんだというようなことを実感できれば、それはとてもいい教育になるし、また観光面から見ても、一種の観光教育になると思っているが、今回そういう意味でいうと、いわゆる教育分野、教育委員会や学校、あるいは子供の両親、こういうところへのアクションというのもどこかで増やしていかなければならないかもしれない。

【平原副委員長】

ワークショップに集まった皆さんの印象としては非常に若い方が多いといった印象であった。

質問だが、集まった皆さんは必ずしも観光の現場の方ではないと思うが、どんな職業の方だったのかということは少し気になっていて、職種によっては、これから

観光について取組を広げていく余地があるのではと思っている。

【見波主任】

観光施設に勤めている方、お土産や特産品を作っている事業者、市民活動されている方。金融機関など、様々な業種の方々が集まった。

観光の現場というものの線引きが非常に難しいが、例えばITとか広告業の方もいらっしやったが、その方々もホームページの作成やポスターの写真を撮るといったような部分で観光に関わりがあると言えるし、金融機関の方も、金銭的な支援を通じて、観光という部分に関わりがあるかとも思う。

【丁野委員長】

このワークショップは引き続き実施する予定なのか。

【見波主任】

基本的には今回の方を中心に1回以上行いたいと考えている。ただ、参加者は制限することはないので、より色々な方に参加していただく必要があると考えている。

【吉田課長】

現在策定いただいているビジョンが4年間の期間であり、ワークショップについても、その計画期間中はずっと行っていきたいと考えている。ワークショップを通して、観光の取組を行っている方々の仲間づくりの場としていきたいと考えている。また、新たな取組の創出のきっかけの場としても期待しているところである。

【丁野委員長】

今回だけで終わりではなく、一種の事業創成塾、地域創成塾のような役割を担っていくということで安心した。

それでは今日の議題（2）「骨子素案（コア部分）について」に入る。事務局から説明をお願いします。

ー（2）骨子素案（コア部分）についてー

【見波主任】

※「資料2 論点メモ」「資料3 前回の振り返り及び骨子素案（コア部分）について」を基に説明

【丁野委員長】

今日の議題の一番重要な部分の検討になると思っているが、ここがぶれてしまうと、後々の検討がうまくいかないということになってしまう。今日、資料2において、4つほどの論点が挙げられているが、基本中の基本という項目ばかりでとても大事なポイントなので、しっかりと読み込んでいただきたいと思う。

ここで、個人の考え方を整理していただく。隣の方と議論してもかまわないので、少し時間を取りたいと思う。

—各委員の資料読み込み—

— (3) 意見交換 —

【丁野委員長】

それでは、各委員から意見を頂戴したいと思う。

【北嶋委員】

上越市は合併して20年、直江津は産業や鉄道と経済が中心。そして、高田は昔の城下町で、花見がある。そして合併して上越市になった地域には、それぞれ町村の時代には、それぞれの魅力をそれぞれが打ち出して来られたという経緯があり、指摘があったように非常に市内の中で観光資源が分散をしている印象がある。

上越市と観光という言葉がなかなか私の中で繋がらない。例えば湯沢町や妙高市のような、お客さんを迎えてお金を落としてもらって、そこで稼いで頑張っている地域というイメージが上越市にはない。

そういう意味では上越市の観光という部分を、行政の計画として整理していくことは非常に大事だと思うが、やはり一体感というか、連携というか上越市というくくりで、まとめるのは難しいというイメージをずっと持っている。

私が今いる会社では、人口がどんどん減っていく中で、地域の足としてだけでなく、観光路線でこれからやっていこうとしているが、その観光路線を作るにあたってやはり、例えば駅単位のガイドブックを作るにしても、糸魚川市と妙高市と比べて、上越市の情報はたくさんあるようだが入手しづらい。誰に聞けばいいのかもわからないといった部分が結構ある。

そういうことを思うとやはり、ここで魅力を語れる方を作るというのは至難の技

ではないかと思っている。

例えば、長岡市では河井継之助が主役の司馬遼太郎の「峠」という小説があって、上越市では隆慶一郎という人が書いた松平忠輝の小説が好きだが、それを読んでいると高田へ行ってみたいと思うし、どういった所なのだろうかと思像する。やはりそういった歴史みたいな部分と、今ある地域の状況っていうのが繋がっていると、非常に外から入りやすいのではと思っている。

【丁野委員長】

その議論はやがてちゃんとしなければいけないと思っていたので、とてもいい意見をいただいたと思う。

上越市に限らず、2005年に合併した市町村は結構たくさんあるが、それがやはり十数年経って、今やっとお互いがなじみ始めたという現状があり、結構年数がかかる。その中で色々な観光ビジョンを作ってきたが、私が一番面白いと思ったのは景観である。

一体的な地域というか、景観で地域を見てると、結局その地域は何でできたのかというのが、とてもわかりやすい。

ある地域の場合であるが、ちょっと大きな山、それをぐるりと回ってみると実は同じ属性の地域というのがある。そこから三本の川が流れ、そして沼地に入って、といったこういうのを一体的にとらえる。だから逆に言うと、昔あった個々の行政区は一体どのように分けられていたのか、みたいなものを逆にそういう景観というところから、説き起こしていったというようなこともあるが、冒頭にこの地域の光をと書いてあるが、皆さんにとっての光はきっといっぱいあるのだろうと思った。

景観の場合だと、皆さんがよそへ行っていて、この地域に帰ってきたときに、「帰ってきたんだ」と思う景観は上越市では何があるだろうか。

例えば、茨城県の日立市ではそれは高い煙突だった。昔の公害を拡散するために建てられたものだが、日立市民はその煙突を見たら日立市に帰ってきたんだと皆が思うという。

何かそういうシンボリックなものが上越市には何かあるだろうか。

【齋藤委員】

私は4月から来た人間として、恐らく違いを感じているかと思うが、私の印象に残った風景は、高田に事務所があるので、高田から見る妙高山と米山である。山が

左右にある風景がまず一つすごく印象に残った。また、直江津の浜から見る夕日がすばらしい景色だと思った。さらに、赤い雪月花が田んぼの真ん中を走る風景が格別である。

【丁野委員長】

この議論は取り留めなくなってしまうが、こういうことは結構大事なこともかもしれない。むしろ市民の方々に問いかけたいようなこともかもしれない。

【山下委員】

策定のポイントの中で何のために観光に取り組むかという意義についてだが、私は、観光はまちづくりの手段であると捉えている。

ワークショップに出られた方の感想で、一部の方の発言では、ご自身の事業に関して強い思い入れがあり、少し周りとの連携がどうかと感じたというお話もあったが、まちづくりという発想にすれば、やはりまちをつくるために、事業者さんがそれぞれ一緒に連携しながら観光を手段として、色々な打ち手を打っていくということができると思う。また、資料の中に各事業に取り組む担い手、プレーヤーという表現があるが、プレーヤーも、おもてなしに磨きをかけて、より高いレベルのおもてなしが出来るよう取り組む必要があると思うが、まちづくりということで考えると、私はここに市民が入ってもいいのではと思っている。

先ほどの景観の話ではないが、市民の方がお花を植えて、外から来る人が気持ちよく過ごして帰ってもらえる、来訪者を受け入れるための工夫をされているような観光地が色々な所にあるが、市民の方がそういう視点で活動されるということも大事になってくると思う。

それから、多種多様な資源が、上越市にはあるということだが、今まではそれぞれの資源をそれぞれの事業者さんがそれぞれの視点で、PRされていたかと思うが、そこにまちづくりという観点で少し考えていただき、ストーリーや物語的な話でうまく組み立てができると、より外の人から見て、面白そうだから行ってみたいというところに繋がるのではないかと思った。

【丁野委員長】

観光の目的となると、多いのは自然や文化財などいろいろあるが、暮らしぶりというものが最近では非常に重要なポイントになってきているかと思う。

【山下委員】

外国の方は日本の田舎を訪れて、田舎暮らしやその土地の人が食べているものを実際食べてみたいということで、それこそものすごいお金持ちの方がバックパッカーのように荷物を持って、あえて田舎に行ってそういう体験をしたいという方がすごく多くいると聞いている。

日本人の方でも、多種多様な価値観に基づいて、色々な観光を楽しんでいる方がいると思うので、やはりこの上越市ならではの資源を活用して、そのような人たちの受け皿にどれだけなれるかというのがポイントになってくる。そのためには市民の方々も巻き込んで、受け皿を作っていく、観光まちづくりという観点での取組が必要になってくるのではと思う。

【上原委員】

最初に確認させていただきたいが、基本理念について「上越らしい観光＝○○○〇」というものを検討していくということであるが、基本理念は文章ではなく、キャッチフレーズで表そうということか、または、資料の上部にあるような基本理念の考え方というのを文章で説明するのか。

【小池副課長】

基本理念の考え方については資料3の9ページの枠の中に書かれたようなことを最終的に整理していくが、それを市民の方によりわかりやすく伝えるときにやはりキャッチフレーズみたいなものがあつた方が、伝えやすいということで、基本理念をキャッチフレーズなのか標語なのか、あるいは箇条書きのような少し短めの文章を今後整理して、皆さんにご提示し、固めていければと考えている。

【吉田課長】

資料3の9ページの上段にあるような文章はしっかり整理したいと考えている。また、議論の中で市民を巻き込むというようなことがあつたが、分かりやすい言葉で、市民の皆さんが、これに向かっていけば、おのずと上越市らしい観光地域づくりができるというものについて、ご意見をいただきたいと考えている。

【上原委員】

基本理念については承知した。

先ほどの景観の話に関連してだが、以前、直江津駅で電車に乗り、出発を待っていた時だが、ホームに雪月花が停まっており、社内の様子が伺えたのだが、そろそ

ろ出発なのか、車内の皆さんがホームに向かって一生懸命手を振っていた。表情は見えなかったが、恐らく笑顔なのだろうなという雰囲気が感じられた。その後、電車が発車していったが、駅員の方やホテルの方かと思うが、弁当を売っていた方が、雪月花が遠くなるまで、大きくにこやかに手を振っている様子を良いなと思いながら見ていた。そして、ふとこれから通るところは雪月花も通るなと思い、雪月花に乗っているつもりで外の景色を見てみると、ちょうど稲刈りが盛んな時期だったため、はさ掛けの米や稲穂のとてもきれいな景色が広がっていた。

また、冬には高田の方が「角巻」や「トンビ」（昔の防寒着）を着て来訪者をお迎えしていて、そういったことはすごく大事で、来訪者も迎えた方も心に残る素晴らしい取組だなと見ていた。

先ほどのまちづくりの観点という話があったが、私は本町5丁目に住んでいたが、商店街では朝と夕方と掃き掃除をしており、その際に隣の家まで掃除をする。もちろん雪が降った際の雪かきもそうだが、みな隣の家まで行く。雁木の下に暮らしている方は、もちろん他の地域でもそうだと思うが、お互いを思いやる気持ちがとても強い。このことはおのずと、来訪者に対する思いやりの心も育まれていると思う。今でも雁木の下では温かいやり取りがされているが、そういったものが、先ほどの雪月花のお見送りなどに繋がっているのだと思う。基本理念にどのように書いたらよいか分からないが、そのように感じている。

【丁野委員長】

なにか情景がとても大事で、やはりこう物語というか情景の中にある物語みたいなものを整理していき、よその方にそれを体験してみたいと思ってもらう。これも一つの大きな入口になってくると思う。とても大事な観点だと思う。

最近、「まちづくり」ということよりも「まちづかい」という言葉をよく使うようになった。みんながまちを使いきる、使いこなすといったことであるが、まちづくりというのはどちらかというとハード（建物）なイメージがあるが、まちをみんなですましく使っていこうということで、上原委員の話はまさにそういうことだと思う。

【今井委員】

私は普段、色々な方とお話するが、私の会社の説明をしていると、どこにあるかわからないとか、上越で葡萄を作っているのかとかワインを作っているのかという話になって、結果として何かやはり上越市は地味なのだろうと思った。乱暴な言い

方かもしれないが上越らしさの良さは地味で、歴史もあって、そういうところが売りなのではないかと考えた。

私の会社も、歴史も長くやらせていただいております、色々なルーツなどを一生懸命説明してもなかなか伝わらない。結局来てもらわないと、例えば空気感とか、世界観を見ない限り、伝わらない。それが他の有名な観光地だったら、すぐパッと言えばなるほどと伝わるが、すぐにイメージできるものというのが上越市にはなかなかないのではないかと考えている。

だから、どこかいいところがないかと聞くと、ないという話になると思う。資料にも一見しただけでは価値が伝わらないと書いてあるが、そういったものの集合体が上越市ではと思った。

今なにか、新しいものを作り出すということは難しいが、皆の意見にあったように、人やまちの文化といったおもてなしできる部分、その良さを深く色々な方に伝えられる魅力はあると思う。

表面的に目立つところを目的に観光する方というより、そこそこ全国を歩き尽くしている方に、一見すると地味だが行ってみたら面白そうだなと思ってもらう。そして来てみたら、歴史があって、文化があって、酒があってと、そのようなものが上越市の魅力になるのではないかと考えている。マイナスに思えることをプラスに持っていくというのが、上越らしい観光なのではないかということも思った。

【丁野委員長】

上越市の観光パンフレットで「上越物語」というのがあるが、全体を見たときに、この裏側にあるものは何なのだろうかと感じた。一つ一つ色々なテーマになるようなものがあるが、なぜ、このまちはこのようなものを生み出してきたのか、それが少し見えない。それぞれが集まって全体として上越市ということだが、これは何なのだろうかという、今のお話はそんな話かとも思うが、ここは作り方の面でちょっとポイントかもしれない。

【亦野委員】

基本理念の設定の考え方からも読み取れるが、皆さんがおっしゃられている通り多種多様で、この「上越らしい観光＝〇〇〇〇」というのを導き出すのは難しい地域なのだろうなというのは非常に感じたところである。

この「上越らしい観光＝〇〇〇〇」を元にスタートを切るためには、例えば地域

に絶対的な観光資源があるか、もしくは絶対的なリーダーがいてその人が引っ張って行くか、このいずれかであればこういうスタートは非常に切りやすいんだろうなと思うが、そういったものがない状況からスタートを切るにあたっては、基本理念が抽象的になることのリスクというの大きいのではないかと感じた。

というのは、先日ワークショップの中で他の方のご発言の中にあっただが、例えば高田で何か催しをすれば直江津の方はまた何かやっているなという冷めた感覚というのがあると。逆もまたしかりなのだが、地域ごとにこのようなことを非常によく感じというような意見があっただが、私はあまりそういった感覚がなく驚いたのだが、だからこそやはり基本理念が抽象的になれば、とらえ方によってそれぞれの地域で違うというリスクが大きいのでということは、非常に感じた。

この基本理念をつくり上げるにあたって重要になるのが基本理念を作り上げるためのプロセスを重視すべきではないかと思った。資料の共通の視点の中で五つの視点があるが、まずこの視点の共有は地域や事業者で行うべきと思った。この五つの視点をもとに、地域の事業者の意見、魅力、また、データ等もあるがこれを吸い上げ、共有する。これを繰り返すことが重要になってくると思うし、これを行うのが、今後数回実施されるワークショップなのだろうなと思った。

上越市の魅力はと聞かれた時、客観的にこういう魅力あるのではというのを実際に事業者などが一緒になって、ワークショップの中で共有しながら作り上げていくことで基本理念が主体的な基本理念になっていく、この吸い上げとその共有を繰り返す中でその基本理念を作り上げていくプロセス、ここにぜひ重点を置いていければ、良いのではないかと感じた。

【丁野委員長】

先ほど少し言い忘れたが、キャッチフレーズという話がでたが、これは呼びかけのようなものなのか、そして、呼びかける相手は誰なのか。ここがポイントである。市民向けなのか、あるいは外の人に向かって、こんなにすごいところなんだよと呼びかけるのか。

今までの観光のビジョンや白書は大体よその人に呼び掛けているものだが、山下委員の言われたような、方向性へ持って行くのだとすると、やはり市民の皆さんに呼びかけて、というようなものが一つのベースになってくる。そこも少し論点になるかもしれない。

【渡辺委員】

ここに帰ってきたと思える風景ということで、私は結構、東京、神奈川に出張に行くことが多いが、やはり新幹線で戻ってくると、長野から山を抜けて新潟に入ったタイミングで景色が変わることがすごく印象に残っていて、景色が切り替わった瞬間に帰ってきたなと思う。やはり景色が切り替わった瞬間というのは遠方へ行かれる方や、帰ってくる方にとっては心が動く瞬間というイメージがある。

あと、先ほどもあったが、夕日というのも一つ大きなポイントで、海に夕日が沈んでいく様子を私はこちらに来るまで見たことがなかったので、天気がいいと本当に視界全体がオレンジ色で、恐らく日本海特有のものだと思うが、上越市の強みとしてどこに出しても恥ずかしくないものかと思っている。

それから、雁木が少し衝撃的で、最初にこちらに来た時に雁木の下はその家の人の敷地だということを知って、寒くて過酷な環境の中でも色々な人が過ごしやすいようにみんなで協力して、雁木を作ったのだろうなと思うと、この風景はやはり今後も残していくべき大事な風景だと思った。

物語がある地域に人が集まるのではとか、地味だけどいろいろなものが集合しているのが上越だという、その辺のキーワードを大事に、この風景と一緒に、ビジョンのコアの部分を考えていけたらと思う。

例えば観光資源としてその雁木や城下町というのは私の中ではインパクトとしては強いが、それらを取り上げると、恐らく中山間地域の方々はまだうちの魅力とは違うとなり、先ほどの直江津と高田の問題ではないが、そっちはそっちで盛り上がってくれてとなってしまうのが心配であるので、みんなで同じ方向を向ける、何かそういった基本的な理念に繋がっていけたらよいと思っている。

【丁野委員長】

私も高知の人間であるから、妙高山や海、それから夕日や雁木を見るとやはり感動するわけだが、地元の人はどう思っているのだろうか。もしかしたら、あんまり魅力を感じてないのではと思う。十日町市に星峠の棚田というのがあるが、それは地元の人たちは恥だという。小さなところで慎ましく農業をやっているのに、大きな田んぼを見ると恥ずかしいというわけである。だから、うちには棚田などないと最初は言っていた。同じかどうか分からないが、そのようなギャップがあるのではないか。

来る人向けの見せ方と地元の方向けの見せ方というものはギャップがあるかもしれない。それも考えなければならない。

【南委員】

基本理念、共通の視点、それから、施策の方向性など、資料の中に書いてあることは、分かりやすく、このような形で進めていただければと思うが、気づいた点が何点かある。

まず基本理念について、先ほど丁野委員長からもお話があったが、どちらに向かってというか誰にキャッチフレーズ的に呼びかけるのかということを考えており、この計画自体が、市民に向けた部分が非常に多いのであれば、市民に向けた内容になると思った。

ただ、非常に難しいと考えており、哲学的なものになれば、観光そのもののイメージが違ってくると思うし、軽いものにすると地域のイメージというものが損なわれると思うが、いずれにしてもワークショップの中で、また皆さんで考えていただければと思った。

それから、基本的な考え方の中で、何のために観光を行うかということだが、私はここが非常にこの計画の肝だと思っているが、市民の方には、まだまだその観光というものに関しては事業者の方が行うことで自分たちは関係ないと思っている人が多いのではと思うし、実際市民の方とお話をしても、やはりそんな話が出る。

それから、ワークショップの中でもお話があったが、自分が今行っている活動が観光に関わるということに気づいてないということもある。そういった意味からこの計画の趣旨で、色々な人に理解してもらって巻き込む、理解者を増やすということであれば、書き振りの話になるが、この部分を非常に厚くしていただければと思う。

それからもう1点、これも今後の話かもしれないが、第1回目の検討委員会の中で、丁野委員長からお話があったが、今回のビジョンの策定の仕方が非常にまれというかユニークな取組だと思うが、このビジョン、それからアクションプランを作っていく過程そのものを計画の中に入れていただけないかと考えている。

このようにして作り進めてきたということが、市民の皆さんに理解いただければ、また印象も変わると思うし、アクションプランの実行性にも繋がっていくと思った。

【丁野委員長】

良い指摘であり、みんなで作ってきたというプロセスをどこかにきちんと書いておく。このことは大事である。そういうものは全国のビジョンでも見たことがない。良いことだと思う。

【板垣委員】

私も今、南委員が話されたことが大事だと思っている。あくまでこれは市の計画という形になるかと思うが、市民の方にホームページに載っているから見てくださいます的なものではなく、作りましたぜひ見てください、ということと、地域の人や来訪者に向けて、こういうものを行っているというようなことが具体的に発信できないと、計画を作っただけで終わってしまうのではと思っている。

それと、計画とは少し離れてしまうが、今やはり「うみがたり」が出来て、今の時期しか「うみがたり」をいかした仕掛けというのはできないと思っている。「うみがたり」も今後ずっと毎年100万人来るかといえば、そういう状況でもないと思うが、そのような中で色々なことを具体的に考えていかなければならないと思っている。「うみがたり」に訪れた方は、直江津のとある海鮮丼の店に行列を作るという状況がある。やはり食に関しては観光客も求めているものだと思うが、例えば、直江津の飲食店がすべて、海鮮丼を提供し、「海鮮丼のまち」みたいな形でPRすれば、海鮮丼を目当てにお客が来るというのも一つの方法かと思う。そういった視点も必要なのではと思っている。

個々の具体的な食といったようなものは盛り込めないかと思うが、計画の先にはそういったものがあるよう、少し計画の中でも触れられないかと思っている。

【齋藤委員】

骨子素案については、よく短い時間で整えられており、よくできていると思っている。

私なりに少し感じたことが何点かあるが、他の委員からも意見が出ているが、まず基本理念についてだが、どこに向けたものかということ考えたほうが良いという話であったり、抽象的になるリスクという話もあったが、キャッチフレーズなので、私はあまりこだわらないほうが良いと思っている。

他の計画などを見ると、もう少しアバウトなもので、例えば県総合計画は「住んでよし、訪れてよしの新潟県」としているし、観光庁も「住んでよし、訪れてよし

の国づくり」というフレーズを使っている。例えば5年後こうありたい、とかワクワクする上越のような、こんな風になりたいというようなものでよいと思っている。

キャッチフレーズにはよくサブタイトルがつくが、先ほど市民の参加がとても大事だという意見があつて、例えば市民自らが何か関わって云々というようなサブタイトルがあつても、わかりやすくよいのではと感じた。

役割が大事だという意見があつたが、私は県の観光推進計画の改訂に少し関わった経験から、私もそこは大事だと思っている。ただ、役割分担という話と推進体制という話は少し違うという気が何となくしているが、共通の視点として膨らますことがなかなか難しいと思うので、恐らく考えられているかと思うが、共通の視点とは別に推進体制や事業評価など、P D C Aサイクルみたいなものを含んだ項目があつてよいと思っている。その中で、ワークショップも位置付け、取り組めるような形だととても良いのではないかと考えている。

あと、私は上越市は広い地区だということをしごく思っている。観光としては、直江津、高田があり、中山間地としてもとても広く、それぞれにとっても良い観光資源があり、中山間地の魅力というのも大いにあると思っている。地理的な特徴をいかに、イメージ図みたいなもので、それぞれの地区はこういう観光地というのが見られるものがあればよいと思った。

恐らく、まちなかで取り組む観光政策と、中山間地で取り組む観光政策は違うのではと思っているが、そういった地理的なものが全体で見えて、尚且つ、鉄道という魅力もまたあるので、そのあたりが上手に表現できるとよいと思った。

【中牧委員（代理 中村課長）】

少し感想みたいな話になって恐縮だが、従来の計画で色々取組を進めたが、思うような成果が上がらなかったといった記載が資料にあつたが、それはなぜか、また成果が上がらなかった要因をどう見ているか、さらに、思うような成果が上がらなかったということが基本理念や方向性といったところに反映されているのかというところが少し疑問に思った。

前回の資料を拝見したが、バットサイクル、グットサイクルの話の中に、ビールメーカー事例があつて、消費者目線で商品開発を行ったということかと思うが、観光についてもマーケティングというか、こちら側の供給側の都合だけではなく、来ていただくお客様が何を求めているのか、何に惹かれるのかというところが大事な

んだらうと思っており、共通の視点や施策の方向性の方に、例えば魅力とニーズのマッチングやデータ分析の強化という話があり、良いことだなと見ていた。

その中で、魅力とニーズとマッチングというその共通の視点の中で、観光資源を取捨選択するのではなくマッチングさせることが重要だということで、キラークンテンツのようなものを目指すのではないという話だったかと思うが、ただ、一方でキラークンテンツはすごくわかりやすい。キラークンテンツがあれば、まず行ってみようかみたいな話になり、せっかくだから他にもいろいろ見ていこうという話にもなるかと思うが、この地域には観光資源が選べないほどたくさんあるのかということを感じた。魅力がすごく多いのだらうと思うが、何かテーマ化ではないが、上越に行ったらこれができるとか、これが見られるあれがやれるといった何かマーカーをするというか、わかりやすくしていくとよいと感じた。

それと私どもは今、インバウンドの推進に重点をおいて取り組んでいるが、方向性の中にインバウンドも含めた受入環境の整備充実ということが記載されているが、インバウンドというと、例えば日本に來られて上越市だけ立ち寄るという話ではないかと思う。周辺の妙高市や糸魚川市、佐渡市などその他のところにも周遊されることがあるかと思うが、広域的な連携や広域的な取り組みについて、どのようにお考えになっているかお聞かせいただければと思う。

【丁野委員長】

インバウンド、それから当然広域連携も実際の計画の中身ではいろいろ触れていかなければならないと思うが、今の段階ではどうか。

【吉田課長】

インバウンドや広域連携については、当市においても外せない視点だと捉えている。ただ、インバウンドに特化したというよりは、受入環境を整えることは、インバウンドも国内の来訪者も両方見据えた環境づくりにもなると考えており、その中で、特に最近だと佐渡の世界遺産についても一つターゲットとしてあり、上越市を起点とした佐渡観光とか、そういったことを今後考えていかなければならないと思っている。当然そうしたことも視野に入れ、今回のビジョンを策定していきたいと考えている。

【平原副委員長】

皆さんの意見の中でいくつかキーワードがあって、景観という話が出てきたが、

昔の風景でいうと、直江津駅に近づいたときにN T Tの鉄塔が見えてくると、上越に帰ってきたなと思う風景で、長野回りから帰ってきたときは妙高山が見えると帰ってきたと思う。最近感じていることは、山や川は、「国破れて山河あり」とあるように、ずっとあるものであるが、今我々が使っている鉄道だったり、高速道路だったりというのもすごく大事だなと思っており、高速道路も長野まできれいになったというのもあって非常に使うようになって、あの風景は我々の故郷と首都圏との入口、境界だなと思っており、また、越後湯沢駅というのも新潟に戻ってきたなと感じる入口であり、そういうところが何か全部繋がってるなという感じがして、何を言いたいかという、上越市は高田開府400年というのがある、どうしても江戸時代に戻りたがるが、江戸時代というのは、今触れられる文化はあまり残っておらず、我々の少なくとも父親世代や祖父、曾祖父の世代の文化というものが、最近掘り起こしができる可能性がある範疇になってきたなという感じがある。

やはり最も重要なのは鉄道の遺産であり、直江津は新潟で最初に鉄道が通ったところなので、そこはやはり取り上げるべきだと思うし、川上善兵衛の偉業や、それが日本のワインを席卷したというところも一つだと思うので、近代の暮らしぶりみたいなものがキーワードであると思う。これはすべてに繋がる話で、味噌や醤油、それから酒も江戸時代の酒を飲んでいる人はいない。近代の酵母の技術が発達して口当たりのいいものを我々は飲んでいる。そういった近代の技術が新潟のよさ、面白さではないかと思っている。

偉人となるとなかなか掴みどころがないが、我々の今の暮らしに繋がるものを作った近代の人や地域といったものを取り上げると、雪国というものもまとめていけるのではないかと思っている。

全体の話で、共通の視点に①から⑤というのがある、魅力とニーズのマッチングというのはとても大事だと思うが、⑤のデータの部分について、来ているお客さんの来訪データや、W i F iの統計なども最近取れるようになってきているので、今後、何年間かで手法を固めていければと思っている。また、産業連関みたいなものが最近かなり発達してきていると思うので、やはり来訪者の消費額に通じるデータを示して行って、なるべく大ざっぱな数字ではない細かいものを拾っていけると次のビジョンに繋がるのではないかと思っている。

【丁野委員長】

今日は、いい視点で意見がたくさん出て、本質に触れるような意見もいただけたかと思うが、ビジョンの基本的な骨格については概ねこれでよいと一応了承をいただいたかと思うが、組み立てと、それから中身に何をを入れていくかという意見をたくさんいただいたので、もう一度皆さんの意見を整理していきたいと思うが、私から一つ意見を申し上げていなかったが、構成の中で、資料の7ページのところであるが、上越市の目指す観光のコア部分、今日はこの部分を議論いただいたが、全体像のところであるが、これは実は従来の計画、ビジョンにありがちな一般的な構成であり、やはり今回のビジョン自体が、市民に問いかける、あるいは市民にとって、事業者にとって分かりやすい、つまり、ビジョンを共有するという観点からすると、このコアの部分の中の特に基本的な考え方あるいは理念という部分は全体の一番前に持ってきてもいいかもしれない。また、市民向けという形で別に冊子を作るということも当然あっていいと思う。いずれにせよ、全体の先頭に持ってくるということも良いのではないかと考えている。

あと、分かりやすいものということであるが、私も実は国交省や経産省の委員会の中で、本屋に平積みできるような報告書を作ろうと言っている。つまり読んでみたいと思うようなものとは、そういうものである。何かそういう感覚も、分かりやすい伝わりやすいものを作ろうとしたときに大事である。

時間になったので、何かその他意見があればお願いしたい。

【平原副委員長】

最近の大河ドラマであるが、大河ドラマは今まで戦国武将が定石だったと思うが、今は、非常に身近な歴史が取り上げられており面白いなと思っている。戦国武将ものは非常に魅力的なコンテンツでここ数年、人気伸びてきた分野だと思うが、上越市の場合は、今後、戦国武将という分野で伸びるのかというところに正直疑問を感じている。

いつまでも上杉頼りでもいいのかということもあるが、やはり我々の目が届く比較的新しい歴史を掘り起こして、産業とか、生業に繋げたほうが面白い。そういう意味でも鉄道はやはり面白いと思っている。

【丁野委員長】

最近、観光に関するテーマがとっても多様化している、深くなっている。

十日町市には笹山遺跡というのがあるが、ほとんど活用されていなかった。ところが、「縄文女子」というものを「じょうもん」というフリーペーパーで募集したら女性がたくさん集まり、3日間で三十何名集まったと。つまり、見せ方である。見せ方、これは先ほどの議論の中でもあったが、地元の方とよそから来る方のギャップの中にヒントがありそうである。

前回、昔からある、強い資源をちょっと見せ方を変えると、また蘇ってくると申し上げた。この辺は非常に古い歴史がある資源がたくさんあるが、先ほど近代とおっしゃっていたが、7世紀8世紀ぐらいからの延々たる歴史、そういうスパンの中で、将来どういうものを描いていくかというようなことをすれば、昔の高田がどうといった話にならないと考えている。そのように考えていくというやり方もあるかもしれない。

時間になったのでここで意見交換を終了する。それでは事務局へお返りする。

【小林主事】

※事務連絡

【吉田課長】

・閉会のあいさつ

9 問合せ先

産業観光交流部観光交流推進課企画係 TEL：025-526-5111（内線 1815、1816）

E-mail：kanko-shinko@city.joetsu.lg.jp

10 その他

別添の会議資料も併せてご覧ください。